

したるにや、又元弘元年七月七日大地震に、此御歌に據ば興國の頃又煙の立たりし事しるし、是より後の事は博も致す、かくて近世の大じき荒びは、寶永四年と云年の神火にぞ有ける。此事種々の書に記せる中に、寺島良安が書に、寶永四年十一月二十三日夜、地震二度、鳴動不止、已刻富士山燒炎高煙聳、焦土降數十里、南至岡部、良栗橋、翌日稍止、又自二十五回六兩日大燒、嵐石碎飛、砂焦散、灰埋原及吉原之地、高五六尺、至江戸之地、高五六寸、而所燒出爲大空穴、其旁生小山、呼稱寶永山と云るは、簡にして精き説なり。(中略)玄道云、不盡獄志に、承平長元永保の火の事を云、元弘紀元七月岳崩數百丈後、三十七年有寶永之災と記せり、三

〔日本紀略(二朱雀)〕承平七年十一月某日、甲斐國言、駿河國富士山神火埋水海。

〔本朝世紀〕長保元年三月七日庚申午後左大臣右大臣内大臣著左仗座召神祇官并陰陽寮仰云駿河國言上解文云、日者不字御山燒由何祟者、卽卜申云、若惟所有兵卒疾疫事歟者、

〔日本紀略(十四條)〕長元六年二月十日丙午、駿河國言上去年十二月十六日富士山火起自峯至山脚、扶桑略記(三十白河)永保三年三月二十八日、有富士山燒燃恠焉。

〔太平記〕天下怪異事

同年○元弘七年七月三日、大地震有テ、紀伊國千里濱遠干渴、俄ニ陸地ナル事二十餘町也、又同七日酉刻ニ地震有テ、富士ノ絶頂崩ル事數百丈也ト、卜部宿禰大龜ヲ焼テ占ヒ、陰陽博士占文ヲ啓テ見ニ、國王位ヲ易大臣遭災トアリ。

〔徵古文書乙斐〕富士山噴火實況覺書(寶永四年)

寶永四年十月、富士山表口駿州大宮之民屋□□濱其後地震日々無止、而月を越十一月十日比々富士山麓一日之内に三四度、鳴動する事甚し、同廿二日之夜、地震之する事三十度計、翌日之朝六時に大地震、女人子ども周章顛倒者、其數夥敷、然どひ死者は壹人も無之候、同朝五時に又大地震鳴動する事、車輪如轟、而富士山麓駿州印野村之上木山と砂山との境より、煙埋卷立登、其音如雷に而民屋も忽潰ごとくに動く故に、壹人も家に居住難成夜に入、右之煙火